

妙案が浮かぶとき

東京大学名誉教授 和田 昭允

えどもその味わいを知らず、のオチとなる。

リンゴは落ちる、月は落ちない、Why?に倣おう。だから妙案捻出にはまず、頭脳の知識探索レーダーを独創に向けて、広域レンジにセットすることが肝要である。

先述述べた血眼モードに切り替える。ズバ抜けた発想は、思いもかけないほどカケ離れた2つの知識からのヒントで産まれることが多い。全く関係ないみたいな出来事結びつけたニュートンの発想「リンゴは落ちる、月は落ちない、Why?」に倣おう。



あすへの話題

頭の活動には、答を出そうと血眼になつて狭い知識領域を探すと、広い草原や森をブラブラ歩きする気分でなんとなく遠くを眺める、の両方がある。大事なのはブラブラの方で、問題から離れて周りを広く見る。頭の中で「アイデアが写る水晶の玉」を転がす気分である。

生来の怠け者である私は、科学者の末席にいて密かに思う。知識を駆り立てて、素晴らしい妙案を捻り出す秘策はないか? 昔から妙案が浮かぶのは枕上、鞍上、厠上の三上、と言われている。よく言い当てているが、鞍上は良き昔の話で、その後を継ぐ自動車の運転中では考え事どころの騒ぎではない。でも今日では馬の代わりに新幹線が、貴重な時間を提供してくれる。なぜボートとできる環境がよいのか?

平成24年4月5日

「思い込み」のご利益

東京大学名誉教授 和田 昭允

鈍根頼みで、ひたすら頑張る。

「森羅万象は廣大無辺」であり「人智は融通無碍」なのだから、頭を柔らかくして自由に発想すれば、発明・発見のチャンスはいくらでも転がっている。後は自分の運



あすへの話題

「仮説」を立て、それを検証するのだ。南米とアフリカの両大陸の向かい合う海岸線は、なんだか良く嵌まり合いそう。では、大地は盤石で不動の常識を疑ってみよう、となつて大陸移動説が生まれた。

眼の鱗が落ちるような素晴らしい妙案は、どうしたら絞り出せるのだろうか? 「こうすれば必ず成功」という必勝の手はないが、その気になればコツみたいなものはある。それは「思い込まない」と「思い込む」だ。両極端のこれらを臨機応変に使分けけるのが、貴方の腕の見せ所である。まず、これまで言われてきた説(常識)を「正しいと思ひ込まない」、つまり疑ってかかることが第一歩。もちろん疑った上で考え抜いた末に、自分なりに納得できる

平成24年4月12日

暗黙知と形式知

東京大学名誉教授 和田 昭允

は、新機軸は生まれようもない。

独創とは、多様な知識の余人には考えおよばない結合だ。であれば頭に暗黙・形式を問わず知を取り込み、組み合わせさせてみる。こうして暗黙知が生まれたら、会話、議論、批判、そして、考え抜くことでハッキリさせる努力をする。知識を詰め込むだけでは、新機軸は生まれようもない。



あすへの話題

植ができることになった。たから法律が作られ、皆が納得して臓器移植ができることになった。

知識には暗黙知と形式知がある。一橋大学の野中郁次郎名誉教授が日本企業の目覚ましい知識創造の要因として提出し世界的に評価された、純国産の誇るべき概念だ。暗黙知は、モノやコトについての自分だけの知識「いわゆる洞察、直感、カンで主観的。だから口でハッキリ言えず、文字や式に書けず、他人に正確に伝えられない。一方の形式知は、数式や文章で論理的・客観的に曖昧さなく人に伝えられ、万人が共有できる。たとえば「死」が暗黙知のうち「死んだ人の臓器摘出の社会的合意は難しい。しかし医学と科学技術が力を合わせて、「死」を心電図や脳波という形式知にしたから法律が作られ、皆が納得して臓器移植ができることになった。